

# 2024年「胃と腸」賞は 池上幸治氏(松山赤十字病院胃腸センター)ら 「自己免疫性胃炎を背景とした胃癌の臨床病理学的特徴」 (59巻1号)が受賞

2025年9月17日(水), ウェビナー形式で開催された早期胃癌研究会にて, 2024年「胃と腸」賞の授賞式が行われ, 池上幸治氏(松山赤十字病院胃腸センター)らが発表した「自己免疫性胃炎を背景とした胃癌の臨床病理学的特徴」(「胃と腸」59巻1号:47-61頁)が受賞した。

授賞式では, 受賞者代表として池上氏が紹介され, 続いて, 「胃と腸」編集委員長の蔵原晃一氏(松山赤十字病院胃腸センター)が祝辞とともに, 選考過程について述べた。

「胃と腸」賞は, その年に「胃と腸」誌に掲載された論文の中から, 特に消化管の形態診断学・治療の進歩と普及および病態解明に寄与した優れた論文に対して贈られる。今回は対象論文147本について「胃と腸」編集委員会で厳正な審査を行い, 決定した。

受賞論文では, 自己免疫性胃炎(autoimmune gastritis; AIG)の臨床的特徴, 胃癌合併例と非合併例の違い, AIG合併胃癌の臨床病理学的特徴について報告がなされている。

AIGは従来, 本邦ではまれな疾患とされてきたが, 近年, 胃内視鏡検診を中心にAIGと診断される症例が増加している。AIGは胃癌の発生源となり, *H. pylori* 感染の減少に伴い, 胃癌の背景疾患としての重要性が相対的に高まってきている。

本論文では, 自験AIG 194例について遡及的に検討を行ったところ, 胃癌合併は36例(18.6%)に47病変認められたと報告している。胃癌合併例と非合併例を比較すると, 胃癌合併例

のほうが高齢で, 内視鏡所見では固着粘液陽性率が低く, 生検標本のupdated Sydney systemによる評価で前庭部腸上皮化生スコアが高かった。AIG合併胃癌の特徴は0-IIa型の早期癌で, 胃型形質の分化型腺癌が典型例と考えられた。AIGには胃腺腫も26例(13.4%)に認められ, 胃癌のうち4例4病変は胃腺腫として経過観察していた症例が悪性化したもので, 腺腫にも注意を要すると考えられた。

受賞者挨拶で池上氏は, “このたびは多数の素晴らしい論文の中から, 栄えある「胃と腸」賞にご選出いただき, 身に余る光栄であり, 誠にありがとうございます。受賞論文は自験例に基づいて自己免疫性胃炎における胃癌合併例の特徴そして合併した胃癌の特徴を論述したものです。本論文は当科において蔵原晃一先生のご指導と病理の大城由美先生の多大なるご尽力を賜り執筆できたもので, 両先生に改めて敬意を表しますとともに, 症例を蓄積された当科OBの先生方とスタッフ一同に感謝いたします。今回の受賞は激励と受け止めています。今後も一例一例丁寧な診療を心がけ, 本研究会と「胃と腸」誌を通じて, 消化管形態診断学の発展に貢献できたらと考えています。ありがとうございました”と述べた。

その後, 池上氏から受賞論文のレビューがなされ, 最後にWeb上で視聴していた参加者から改めて称賛の拍手が送られ, 授賞式は終了した。



2024年「胃と腸」賞を受賞した池上幸治氏(写真左)と「胃と腸」編集委員長の蔵原晃一氏(写真右)